

若者にしのび寄る結核

—どこにリスクが潜んでいるのか—



川崎市健康福祉局健康安全室エイズ・結核担当

担当係長 鈴木 宣子

世界結核デー記念フォーラムは第17回国際結核セミナーが閉会したのち夜の部として、同会場にて開催されました。

冒頭、東京都福祉保健局健康安全部感染症対策課の渡部ゆう担当係長から「東京都の若年層結核患者調査」の報告がありました。平成21年の20歳から49歳の登録患者1,106名について調査をしたところ、外国人は134名、8割強は日本人。働いている人は70%、うち常勤が49.5%。居住形態は363名が単身と1/3を占めていました。治療の「中断あり」は48人(4.3%)と全年齢の率より高く、中断した人の半数が「単身」でした。中断者の勤務形態は常勤が1/3と多く、DOTSの支援方法が「電話連絡等での確認のみ」という方が多かったそうです。保健所の枠組みの中で保健師が支援しているパターンが多くみられ、治療途中の転出も182名(16.5%)と、大都市ならではの若年者対策が必要と問題提起がありました。

後半は対談形式で、「患者を生きる～感染症～」の連載を担当した朝日新聞東京本社の鈴木彩子さん、ストップ結核パートナーシップ日本事務局の宮本彩子さん、結核予防会事業部普及広報課の成瀬匡則さん（御自身が多剤耐性結核を既往）も加わり、結核のイメージのない若い世代への普及啓発をどのようにしていくか、意見が交わされました。

今年はタレントのJOYさんを「ストップ結核ボランティア大使」に起用したことで注目が集まり、JOYさん自身もツイッターやブログ、フェイスブック等で結核という病気のこと、入院生活のこと等を発信したので若い層に情報が届いたそうです。若い層への働きかけにはこういった新しいメディアの活用が効果的だと対談の中で話し合われました。

発症した患者の周りの人への情報提供や衛生教育は保健所でもできますが、何も知らない一般の人への普及啓発が一番苦勞をする点です。若い層は特に新聞も

読んでいないし、結核のイメージやリスクがわからない。よく分からないけど怖いという人もいて、病院の面会に行っても大丈夫か？ 壁を触って平気か？ 会社にはバレたくない。患者の家の周囲を歩きたくない等、理解されていない現状が浮き彫りになりました。

東京都の調査で若い人の中断率が4.3%とありましたが、病気や治療の理解不足や塗抹陰性の患者の中断率が高いということも示され、薬を飲む意味をきちんと伝えることの大切さを考えさせられました。

塗抹陽性の患者は入院生活に「もう戻りたくない」という意識が芽生え、服薬を頑張る傾向がありますが、通院で飲み続けている単身の人への支援は強化する必要があります。

中には、ツイッター等のつぶやきに「ひとりで飲み続けるのは孤独だ」という人もいたそうです。発信はしたいけどレスポンスはもらえないという人もいるなかなか難しい世代に保健所の地域DOTSは馴染むのか？ 大都市の行政の保健師ならば一度はぶつかる壁かと思います。

多剤耐性結核を既往した成瀬さんは体験談としてこんな話を聞かせてくれました。「退院直後は保健所の保健師に“そんなにかかわらなくていいよ”と感じていた。いざ職場に復帰すると月に1～2回薬を飲み忘れていた。自宅に戻った時に時間を合わせて保健師が訪問してくれて薬殻をチェックしてくれた。それがありがたかったと今は思う」と。この言葉に支援する側も考えさせられたと思います。

ネットカフェ、カラオケ、塾、パチンコ、サウナ、カプセルホテル、通勤電車…思わぬ場所での集団感染の現状が見受けられています。リスクの高いエリアには目につくところに情報発信を！ 大都市ならではの若年者対策に、新しいメディアを活用したり、行政間や、医療機関との連携を強化しながら取り組んでいこうと気持ちを新たにしました。



対談による意見交換が行われました